

佳作

「やればできる」を信じて

新潟県立柏崎翔洋中等教育学校

2年 伊藤 恵理子

私は今、何事にも挑戦している。失敗しても、成功するまで何度も何度もやってみている。しかし、過去の私は違った。挑戦することが怖かった。失敗することが嫌いだった。諦めることが得意だった。そんなマイナス思考がプラス思考に変わったのは、祖母のある言葉のおかげだ。この作文を未来で読んでいる私は、あの出来事を覚えているだろうか。

小学1年生の冬休み明け頃から逆上がりの練習をしていた私。学校から帰ると祖母の家を訪ね、そこにある鉄棒でほとんど毎日練習をした。

小学2年生になり、宿題の量が増えた。その分自由時間が減った。それでも、週に何回かは必ず逆上がりの練習をした。しかし、冬休みが近づいてきても逆上がりができることは一度もなかった。同学年の友達ができるのに私にはできていない。何度頑張っても失敗ばかりで、手のひらには豆ができるだけ……。そんな悔しさと手の痛さで失敗をすることがもっと怖くなり、だんだんと鉄棒から離れていった。

「私には逆上がりなんてできないんだな……。」

ボソッとつぶやいた。

冬休みになり、普段より祖母の家に行く機会が増えた。もちろん鉄棒には触らなかつた。

「前まではほとんど毎日鉄棒をしていたのに、最近は技の練習をしていないみたいだね。何かあったのかい？」

ある日、祖母に尋ねられた。

「逆上がりができないから、鉄棒の練習辞めたんだ。もう諦めたよ。」

本当に諦めていた。1年経ってもできていないから、これ以上の練習は無駄。もう、逆上がりなんてできなくていい。そんなことを思っていた。適当に相づちをして家事に戻るだろうという少しの期待を、祖母は裏切った。

「最初は誰でもできないの。恵理ちゃんはやればできる子だよ。」

ハッとした。そのとき私は、逆上がりができる友達だって何度も練習を重ねていることに気づいた。私は逆上がりができないことに焦って、そんなことが見えてなかつた。

「補助してあげるから、またやってみないかい？」

「うん、やってみる！」

祖母の言葉で自信がついた。久しぶりに鉄棒に触り、逆上がりをやってみた。1回だけではできなかった。でも今日は、もう少しだけ頑張りたい、という気持ちが強くて、何度もやってみた。何度も何度も挑戦した。失敗するたびに、手のひらに増えていく豆は痛かった。でも、失敗を重ねていくにつれ、改善点が具体的に分かってきた。これまでできていること、改善すべきことの両方を意識し、練習した。

祖母に助言されてから1時間程経った頃だった。その日は何回挑戦をしたのだろうか。たった数秒の出来事だった。鉄棒をしっかりとつかみ、助走をつける。腕を曲げて力を入れる。お腹を鉄棒に近づける。それと同時に勢いよく床を蹴り、足を上に上げる。知らないうちに回ることができていた。前からずっと練習をした成果が表れたのだ。

「恵理ちゃん、おめでとう！ やればできるじゃないか。」

祖母に言われてうれしかった。やればできる、という祖母の言葉は本当だった。

今も私は、やればできる、という言葉を大切にしている。特に、興味のあること、苦手なことをするとき、その言葉を思い出してから行動している。やればできる、それは私たち人を含めた、すべての生き物に贈るエールだとよく感じる。

未来の私は、諦めることを簡単にしているだろうか。もしそうであれば、簡単には諦めないでほしい。諦めることが大事なきっかけであるが、それ以上に挑戦することが大事だと思う。何度も挑戦して、辞めたくになったら辞めればいい。諦めたくになったら諦めればいい。それも一つの手段である。でも、1回でもいいから挑戦してみるのはどうだろうか。成功するかもしれない。はたまた失敗するかもしれない。どちらにしろ、自分自身が成長できることには変わりない。やればできる。これからもこの言葉を大切に、挑戦を続けていきたい。